

平成 26 年 5 月 28 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520283

研究課題名(和文)世界シェイクスピア上演をととした異文化理解教育

研究課題名(英文) Intercultural Education Through Global Shakespeare Performances

研究代表者

浜名 恵美 (HAMANA, Emi)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：20149355

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：世界シェイクスピア上演(翻訳、翻案も含む)に焦点をあわせて「演劇をととした異文化理解教育」の研究を行った。シェイクスピアと異文化理解教育の接合に関しては、本研究代表者が実質的にパイオニアである。本研究では、次世代の研究者と共に、異文化理解教育に資する世界シェイクスピア上演を理論と実践の両面から解明する基盤の構築を行なった。3年間で、異文化理解教育に資する世界シェイクスピア上演の多様な実例を見出すと同時に、今後の世界シェイクスピア演劇をととした異文化理解教育のあり方に有意義な提言を行うことができた。

研究成果の概要(英文)：We researched intercultural education in the theatre arts with a focus on Shakespeare performances worldwide, including translated and/or adapted plays. I am virtually a pioneer in combining Shakespeare studies and intercultural education. Assisted by a younger researcher, I built a foundation on which to explore both the theory and the practice of global Shakespeare performances in order to contribute to intercultural education research. We identified a variety of such performances and offer effective suggestions for promoting intercultural education through world Shakespeare performances.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：世界シェイクスピア上演 異文化理解 上演研究 パフォーマンス 文化交流 デジタル・アーカイブ 国際情報交換 国際研究者交流

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成 16 - 18 年度の科学研究「シェイクスピア演劇における異文化コンフリクト理解のための分析モデル構築」と平成 19 - 21 年度の科学研究「シェイクスピア演劇の異文化パフォーマンス：相互理解促進モデル」の発展を目指して始まった。

(1) 国内・国外の研究動向及び位置づけ

世界シェイクスピア上演と異文化理解教育の研究は国内外で盛んであるが、Google jp と Google USA で “Shakespeare”, “intercultural understanding”, “intercultural education”,

“theatre” の語をかけて検索すると、第 1 頁に Emi Hamana の研究業績が多数現れる(2010年10月現在)ように、浜名が上記の全項目を包括的に研究している先駆者だと言えた。経済や文化のグローバル化が進む今日、世界シェイクスピア演劇をとおした異文化理解教育はますます必要とされる分野であり、それを日本の研究者が中心となって研究し、その成果を国際的に発信していくことの意義は大きいと言えた。

世界シェイクスピア上演の意義と動向

世界シェイクスピア会議が、1971年の第1回から、世界各地の上演に注目し、今日では“World Shakespeares”という研究領域が定着し、特に欧米とアジアの研究者が研究を推進している。Sonia Massai, ed. *World-Wide Shakespeares* (London: Routledge, 2005) や Richard Fotheringham, et al. eds., *Shakespeare's World/World Shakespeares* (Newark: U of Delaware P, 2008) をはじめとして、世界中の研究者による成果が、本、論文(集)、ホームページ等で発表されていた。また東アジアの研究チームが、欧米中心主義を是正することを目指して、2010年から ASI|A (Asian Shakespeare Intercultural Archive) で英語・中国語・日本語の字幕付でアジアのシェイクスピア上演の録画の保存・公開を開始した。

演劇の意義 インターネット文化全盛のために世界的に演劇人口の減少が心配されているが、演劇は、デジタル文化や仮想現実とは異なり、役者と観客の間の相互作用に基づく、能動的な分野である。舞台上には生身の役者がいて、彼らが演じる芝居に想像力を働かせてコミットし、そこで演じられる世界を実感するところに最大の特色がある。演劇の力は、他者への想像力を働かせながら、創造力を発信し、その場にあわせた観客と共に場を構築していくことである。

異文化理解教育の意義 異文化理解教育とは、自文化中心主義の価値観を相対化し、人種・民族・宗教・文化・言語などの差異や多様性に気づき、できる限り偏見にとらわれずに異質な他者と共生をはかっていく力を養

成することを目指す。

本研究はそれぞれ現代社会にとって重要な3つの領域を接合し、その相乗効果により、より大きな成果をあげることを目指す革新的な学際研究である。

(2) 着想にいたった経緯(従来の研究成果をふまへ)

上演研究を専門としているシェイクスピア研究者は、多様な上演の形態に注目するが、異文化理解教育の促進に関しては無関心な傾向がある。他方、異文化理解教育や外国語教育の現場では、対話や劇などの教材の活用に注目してきたが、現実にはほとんど無数の現代版や翻案があるにもかかわらず、シェイクスピアは「古典」として敬遠される傾向がある。しかし、本研究では、どれほど困難でも、世界の人々の共生のためには、異文化理解の促進が最重要であると考えるので、世界シェイクスピア上演をとおした異文化理解教育の可能性について独自に探求することを目指した。

2. 研究の目的

本研究は平成 16 - 18 年度の科学研究「シェイクスピア演劇における異文化コンフリクト理解のための分析モデル構築」と平成 19 - 21 年度の科学研究「シェイクスピア演劇の異文化パフォーマンス：相互理解促進モデル」を発展させたものである。前者では「異文化コンフリクト」を重点的に追究し、後者では異文化コンフリクトを乗り越える「異文化理解」に重点を置いた。本研究では、世界シェイクスピア上演に焦点をあわせて、「演劇をとおした異文化理解教育」を追究する。

本研究では、異文化理解教育に資する世界シェイクスピア上演(翻訳、翻案を含む)を理論と実践の両面から解明する基盤の構築を行なうことと、異文化理解教育に資する世界シェイクスピア上演の多様な実例を見出すと同時に、今後の世界シェイクスピア演劇をとおした異文化理解教育のあり方に有意義な提言を行うことを目指した。

3. 研究の方法

主要な方法は、異文化理解教育に資する国内外のシェイクスピア上演の実地調査、国内外の関連学会への参加と研究者との意見交換、インターネットを含めた情報収集、映像資料分析、文献調査、3年目に予定した国際シンポジウム「世界シェイクスピア上演をとおした異文化理解教育」の開催である。

4. 研究成果

(1) 平成 23 年度の研究成果

浜名は、平成 23 年 4 - 7 月のサバティカルと 8 月の夏期休暇を活用して、2冊目の単著『文化と文化をつなぐ：シェイクスピアから現代アジア演劇まで』の原稿を完成した。9

月に筑波大学出版会に出版企画提案書を提出し、厳格な審査を経て採用され、平成 24 年に出版されることとなった。あわせて、世界シェイクスピア上演、演劇理論、異文化理解教育を重点的に検討するために、文献調査と AISJIA の本格的な分析を開始した。7 月には、第 8 回世界シェイクスピア会議(プラハ)の“World Shakespeares”のセミナーで研究発表を行い、成果を問うとともに、平成 25 年度開催予定の国際会議のためにも、海外の研究者との関係を強化した。発表原稿は、平成 24 年秋にスペインのアリカンテ大学紀要の特集号に掲載された。8 月下旬には富山県の利賀で開催される SCOT SUMMER FESTIVAL に出張し、世界的に著名な異文化演劇の先駆者の一人である演出家・鈴木忠志の最新の演出と思想を調査した。当初予定していたドイツへの出張は予算と時間の関係で実現しなかったが、シェイクスピア演劇の上演を実地調査し、最新の動向の一端を分析し、異文化理解に資するシェイクスピア演劇の上演のあり方について考察することはできた。平成 22 年度にインドで開催された国際シェイクスピア学会の発表原稿を英語のレポートとして出版した。

近藤は、第 50 回日本シェイクスピア学会(平成 23 年 10 月、開催校：聖心女子大学)において、「シェイクスピアを教える」というセミナーのコーディネイターを務め、シェイクスピアを教えることの困難、工夫、意義等について、若手・中堅研究者たちと検討した。また、共著『今を生きるシェイクスピア アダプテーションと文化理解からの入門』(研究社)を出版し、明治期日本の『お気に召すまま』翻案小説のテキスト分析を行った。日本におけるシェイクスピア受容の諸相の検討が役割分担上効果的であると判断し海外出張はしなかったが、明治翻訳文学全集を購入し、翻訳・翻案研究を推進した。

(2) 平成 24 年度の研究成果

浜名は、5 月末から 6 月初旬まで、ロンドン・オリンピックに合わせて開催されたシェイクスピア・オリンピックの一環であるロンドンのグローブ座の Globe to Globe 2012 (シェイクスピアの 37 作品を世界各地から招聘された劇団により 37 言語で上演)の上演研究のために出張し、アフリカや中近東等の 7 作品を見て、その報告書を英語で出版した。8 月下旬には富山県の利賀で開催された演劇祭に出張した。

平成 24 年 8 月に、浜名の著者『文化と文化をつなぐ：シェイクスピアから現代アジア演劇まで』が筑波大学出版会から出版された。英語で書かれた 3 本の論文と報告書が、それぞれインド、スペイン、日本で刊行された。

国際シンポジウム開催は、平成 24 年 9 月の日本政府の尖閣列島国有化により発生した激烈な反日運動のために、平成 24 年 10 月に予定されていた北京における鈴木忠志演

出の日中共同公演『リア王』が延期されるという全く想定外の事態により、平成 26 年度以降に延期せざるをえなくなった。

近藤は、平成 24 年度末に実施された日本シェイクスピア協会会員の投票によって実施される選挙により、運営委員に選出され、シェイクスピアの上演研究分野等の委員を務める予定となった。また、共著『愛の技法：クィア・リーディングとは何か』(中央大学出版部)を出版し、明治期日本の『ロミオとジュリエット』の翻案小説のテキスト分析を行い、日本におけるシェイクスピア受容の諸相の検討を推進した。

(3) 平成 25 年度の研究成果

浜名は、8 月にロンドンに出張し、グローブ座の演目を中心として、シェイクスピア作品の上演の実地調査を行った。

平成 24 年度の研究成果に記載したように、本研究が目指していた国際シンポジウム開催は、平成 24 年 9 月の日本政府の尖閣列島国有化宣言により、平成 24 年 10 月に予定されていた北京における鈴木忠志演出の日中共同公演『リア王』が延期されるという全く想定外の事態により、平成 26 年度以降に延期せざるをえなくなった。しかし、浜名は、日本における国際シンポジウム開催と比べて遜色のない国際的活躍を行うことができた。

浜名は、平成 25 年 10 月に開催された日本シェイクスピア学会(開催校：鹿児島大学)に出張し、学会運営委員会から平成 26 年度のシェイクスピア祭の特別講演の講師を依頼された。

浜名は、平成 25 年 12 月にインドのコルカタとラクナウで開催された二つの国際会議に招聘され、コルカタでは口頭発表(平成 26 年度、インドの学術誌に掲載予定)、ラクナウでは、開会スピーチとワークショップ(東インド・シェイクスピア協会会長アマタヴァ・ロイ教授、カリフォルニア大学アーヴァイン演劇学部のプライアン・レノルズ教授、浜名)を行った。

近藤は、日本シェイクスピア協会運営委員会委員として、国際的にも高く評価されている英語の学会誌 Shakespeare Studies の劇評分野等の委員として活動し、浜名は performance editor として相互に協力し、世界シェイクスピアをとおした異文化理解教育の研究を推進した。また、近藤は、明治時代のシェイクスピアの受容・翻訳・改作の研究を推進し、日本におけるシェイクスピアをとおした異文化理解教育の解明に努めた。

(4) 3 年間の成果の総括

本研究の主要な成果としては、以下の 3 点を挙げることができる。

英語論文 5 本、日本語論文 4 本、英語口頭発表 4 本、日本語口頭発表 2 本、日本語図書

5本。

海外出張(連合王国2回、チェコ共和国1回、インド共和国1回)、国内出張(静岡県、富山県、鹿児島県)による実地調査。

(注)自費等による出張を含む。

英語と日本語によるホームページの維持。

から によって、世界シェイクスピア上演をとおした異文化理解教育の理論と実践の研究の基盤を構築することができた。しかし、想定外の事態のために国際シンポジウムを開催し、その成果を英語で公開することができなくなったので、今後は改めてこの課題と取り組む必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

浜名恵美「外国語を学ぶ意義」、筑波大学外国語センター紀要『外国語教育論集』、巻頭文、第35号、p.1. 査読無、2013.

浜名恵美「多言語状況を生きるために」、筑波大学外国語センター学群充実事業報告書、第1巻、pp.1-2, 査読無、2013.

近藤弘幸「国民国家のマクベス夫人：宇田川文海『船戦』(1894-1895)」、東京学芸大学外国語・外国文化研究講座紀要『英學論考』、第42巻、pp.29-51, 査読無、2013.

Emi Hamana, “Contemporary Japanese Responses to Shakespeare: Problems and Possibilities, *Theatre International: East-West Perspectives on Theatre*, Vol.V Essays on the Theory and Praxis of World Drama, Shakespeare Number (Kolkata, India), Vol.V, pp.11-25, 査読有, 2012.

Emi Hamana, “This Is, and Is Not Shakespeare: A Japanese-Korean Transformation of *Othello*,” *Alicante Journal of English Studies* (Valencia, Spain), Vol.25, pp.179-191, 査読有, 2012.

Emi Hamana, “A Report on Globe to Globe 2012: Shakespeare’s 37 Plays in 37 Languages,” 筑波大学外国語センター紀要『外国語教育論集』、第34号、pp.123-135, 査読有, 2012.

Emi Hamana, “*Othello* in the Japanese Mugen Noh Style with Elements of Korean Shamanism: A Creative Subversion,” 筑波大学大学院人文社会科学研究所文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝編』、第59巻、pp.75-91, 査読有, 2011.

Emi Hamana, “Performance Review: ‘Mad’ Hamlet as Our Contemporary: *Hamlet* by Schaubühne Berlin, Marin Sorescu National Theatre, 7th International Shakespeare Festival, Criova, Romania, 1 May 2010,” *Shakespeare Studies* (The Shakespeare Society of Japan),

Vol. 48, pp.48-50, 査読有, 2011.

浜名恵美「《国際学会報告》第6回世界シェイクスピア学会 東インド・シェイクスピア学会とラビンドラ・バラティー大学・シェイクスピア・センター共催、開催地：コルカタ、期間2010年12月11日 15日」、*Shakespeare News* (日本シェイクスピア協会)、第50巻第2号、pp.26-28, 査読有, 2011.

[学会発表](計6件)

Emi Hamana, “Workshop: Shakespeare and the Ethics of Management,” International Conference on Literature, Language and Communication: An Essential Trident,”招待ワークショップ、アミティ大学(インド共和国ラクナウ)、2013年12月10日.

Emi Hamana, “Keynote Speech,” International Conference on Literature, Language and Communication: An Essential Trident,”招待スピーチ、アミティ大学(インド共和国ラクナウ)、2013年12月9日.

Emi Hamana, “Multilingual Performance of Shakespeare Worldwide: Multilingual *King Lear*, Directed by Tadashi Suzuki as a Case Study,” International Conference on Translation, Shakespeare, and Comparative Literature, 招待講演、東シェイクスピア協会(開催校：Surendanath College for Women, インド共和国コルカタ)、2013年12月6日.

植明子「シェイクスピア劇で少年が演じる女の‘ambition’」、日本シェイクスピア協会・日本英文学共催シェイクスピア祭、特別講演(招聘講演) 会場：学習院大学、2013年4月27日.

Emi Hamana, “Keynote Lecture IV: Connecting Cultures: An Israeli-Japanese Collaboration of the Trojan Women,” 大学の世界展開力強化事業グローバル人材育成のための人社系欧州・東アジア協働教育「第3回欧州・東アジア協働教育プラットフォーム形成フォーラム」(招聘講演) 京都烏丸ホール、2013年2月17日.

近藤弘幸「セミナー2 シェイクスピアを教える」、コーディネイター、第50回シェイクスピア学会、会場：聖心女子大学、2011年10月23日.

[図書](計5件)

星久美子他3名編『シェイクスピア・リズム 英国ルネサンスから現代へ』、金星堂、全232ページ(浜名執筆 187-198ページ)、2013年.

浜名恵美『文化と文化をつなぐ：シェイクスピアから現代アジア演劇まで』、筑波大学出版会、全247ページ、2012年.

近藤弘幸他6名『愛の技法 クィア・リーディングとは何か』、中央大学出版部、全219ページ(近藤執筆 33-53ページ)、2012年.

楠明子『シェイクスピア劇の 女 たち
少年俳優とエリザベス朝の大衆文化』、
みすず書房、全 224 ページ、2012 年。
近藤弘幸他 5 名『今を生きるシェイクスピア
アダプテーションと文化理解からの
入門』、研究社、全 246 ページ（近藤執筆
191-220 ページ）、2011 年。

〔その他〕

ホームページ

<http://www.emihamana.com>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浜名 恵美 (HAMANA, Emi)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：20149355

(2) 研究分担者

近藤 弘幸 (KONDO, Horoyuki)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：00302901

(3) 研究協力者

楠 明子 (KUSUNOKI, Akiko)
ロンドン大学 (King's College) 客員教授、
東京女子大学名誉教授
(平成 23~24 年度：連携研究者、東京女
子大学・特任教授、研究者番号：40104591、
平成 25 年度：研究協力者)